閑人閑語

最後の三分之一

●猪飼 國夫●

● 明治は遠い

私事で申し訳ないが，筆者の母親が逝った．大正2年（1912年）の春の生まれなので，明治の匂いが強く残る大正人だった．

彼女だけではないが，人がこのくらいの歳まで生きると，人生を三分したときにそのすべてがほぼ等しく30年程度になる．すなわち，結婚するまでの30年，子供が結婚するまでの次の30年，そして最後の30年である．昔はこれが各20年くらいであったのが寿命の延びとともに長くなった．

と言っても，明治は1911年の7月30日[注]まで続いていたが，すでに終わって96年になる．すなわち明治以降の時代が，長めに生きた人のほぼ一生分過ぎたということである．

この間，情報伝達および情報処理技術は飛躍的に発展した．それとともにいろいろなことが複雑化した．しかし，人はその長い時代すべてを生き延びねばならない．母親もテレビやエアコンのリモコンは使えたが，新型電子レンジや携帯電話の操作方法はついに身につけることができなかった．病院の電動ベッドの操作にも戸惑っていた．

● 一世代は30年

ところで，昔から何かが脚光を浴びていられるのは，大体30年くらいの間と言われている．人間は当然そうで，仕事や芸能やスポーツ，その他ありとあらゆる分野で平均的にそのくらいの間は表舞台で活躍できるようである．もちろん個人だけではなく事業も同じである．特定の技術を背景にした企業もしかりである．実際には政治もそうであろうと思われる．この寿命を乗り越えるには，新発明や技術革新，意識・制度改革が必要なのである．

そうすると今から50年ほど前に本格的に立ち上がった計算機技術は，すでに老後の年代が近いという計算になる．実際にはパソコンの出現により，ワークステーションと称された機種を含めたそれまでの計算機とは，技術の土台が変わってしまうことで新しい30年を謳歌（おうか）している，と考えることができる．しかし，このパソコンの時代もそろそろ新しい概念に首座を明け渡すかもしれない．

注：「改元の詔書」により，明治45年は7月30日までで，大正元年も同じく7月30日から始まる．

● 技術者の老害

“50，60洟垂れ（はなた）小僧”という文学・芸術・伝統文化や政治家の世界もあるが，人が歳を取ったことによる効用と過去に固執することによる弊害は，一つの天秤の両側に懸けられていると考えてよい．

研究者や技術者について言えば，過去を研究する文科系の積み上げの世界を除けば弊害が効用を上回ると考えるのが正しい認識であろう．政治家と同じく老害である．

筆者も母親がいなくなったことで，最後の1/3の人生にいや応なく突入させられた．今後の人生は，新技術の開発に邁進しようとして悪あがきするよりも，若手技術者の発想力を如何に向上させるかという方向に視点を置くべきであると考えている．

● 日本の技術の黄昏

人が黄昏になるのと同じく，技術にも黄昏が来る．技術は持続的な変革や発展が常時ないと，30年以内に製品あるいは事業としての寿命が尽きてしまう．ファクシミリ，ADSL，CRTディスプレイなど終焉を迎えたり迎えつつある技術は少なくない．今までの思考法に依存していると，人の老齢化とともに国内の技術や政治などの制度も老齢化してしまうのである．

日本人は元来精細なシステムを構築するのは意外と上手いが，変革するのは非常に下手である．融通無碍（ゆうずうむげ）という感覚が少ないのである．作った制度や製造法を必死に維持しようという性癖を持っている．これは伝統文化の維持には有効に働くが，技術や政治に対しては，基本的に老害が発生しやすい土壌がある．

戦争直後に産まれたベビーブーム世代の大量退職が起きている．そのような方々が今後も老害を撒き散らすことなく世の中の役に立つには，前の1/3の時代をどう生きたかということと，身体と精神の健康を今後どれだけ維持できるかということに，その可能性はかかっている．

技術も同じことであり，その技術がどれだけ多くの人の役に立ったかということと，いかに健全に維持されてきたかについて考慮しないと最盛期の30年が過ぎると終わりになってしまう．実態がない高額の投資で多大な被害を出したIP電話事業だけでなく，ISDN事業でさえも健全だったかどうか検証が必要であろう．

30年持つものが少ない

いかい・くにお　博士（工学）